

農村の伝統的祭礼における現在の意義

山形県鶴岡市櫛引町の王祇祭を例に

長澤 壮平

NAGASAWA Sōhei

問題設定

現代の農村は、戦後の兼業化、機械化などによって、イエ相互の依存性が弱まり個別化が進んだ。さらに道路網の発達、農外就業、農業経営の多様化、生活物資の商品化によって、人々の生活は広域化してきた。しかし他方でこの過程は、生活における共同性の崩壊をもたらし、結果として社会的孤立、自殺者の増加、児童虐待などといった諸問題を呼び起こしてしまった。

こうしたなか新たな共同性の構築が緊急の課題となっているが、恩田は互助行為論の観点から、「ユイ」「モヤイ」「テツダイ」といった村落社会における伝統的な互助システムの知恵を読み解き、その現代的な可能性を指し示している（恩田 2006）。一方で、天野正子は前近代において「古い」が豊かな意味を持っており、その思考がもつ現代に通じる意義に光を当てている（天野 2006）。これらの研究において共通する重要性は、前近代的な意識と、その実践的意義そのものに焦点を当てたことにある。

本稿ではとりわけ祭礼文化を取り上げ、その現代的意義を考察する。現在における祭祀文化のありようは、祭祀制度の変容や新たな主体的構築への角度から研究が進められてきた（松平 1990；金子 1996；竹元

2008）。このうち、とりわけ竹元の研究は祭りの活動に内属する社会的機能を析出し、そこに地域活動の自発的生起要因を見出すものとして大きな意義をもつと考えられる。竹元の論文は伝統的でありながらもとくに近年発展してきた祭りを取り上げたものであり、現在の地域活動を検討するにふさわしい事例であるが、本稿ではあえて伝統的祭礼における前近代的な側面を取り上げたい。前近代的祭礼といえ、社会学的視点からは過去の遺物とみなされる傾向が強い。そのさい、とりわけ封建的、階層差別、集団の閉鎖性といった負の側面が意識されるだろう。一方で前近代的祭祀は伝承される地域に利益をもたらす「文化資源」とみなされる。しかしながら、伝統的祭祀が時代に見合わない側面や文化資源の側面を含んでいることを認めたいうえでなお、本稿では前近代的な祭礼の内容に焦点を当てる。その理由は、第一にそれが伝統的祭礼に特有の社会的機能を持っていると考えられるからである。この点では、恩田や天野と問題意識を共有している。第二に、伝統的祭礼によるコミュニティの統合が、固有の地域においてなされるということの必然性を再考したいからである。かつて鈴木榮太郎（鈴木 1969）が述べたように、自然村におけ

る共同体は「氏神・産土神・鎮守」を中心とすることによってはじめて共同体たりえた。つまり、その土地の自然やそこに根ざして親を生み育てた先祖との精神的紐帯が、共同体の第一条件であった。地域固有性に強く関わる「自然」と「先祖」という要素が、社会秩序にとってどのような意味を持ちうるか。これを再考することがもうひとつの課題である。

以上のような探求を進めるために、山形県鶴岡市内の黒川地区に伝承される「王祇祭」を取り上げる。その理由は、王祇祭が前近代的な制度をとどめつつ、その制度が現代の日常的現実に関わる重要な意義を持っていることから、本稿の課題にとってまたとない特徴をそなえているからである。

黒川と王祇祭の概要

以下では黒川と王祇祭の概要について述べていくが、あくまで本稿の視角にのって、ごくおおまかに述べることにする。

出羽三山の麓に「王祇祭」およびこの祭りの中核を担う神事芸能「黒川能」¹を伝承する黒川がある。黒川が位置する櫛引町は、2005年10月1日に、藤島町、羽黒町、朝日村、温海町とともに鶴岡市へ合併された。2005年現在、人口は1597名となっており、就業者総数857名のうち、農業従事者は171名、その他第二次産業従事者は304名、第三次産業従事者は382名となっている。経営耕地は約430haほどあり、戦前までは稲作を中心としていたが、現在、農業従事者はわずかと20%ほどとなっている。10の集落から構成される黒川の住民のほとんどは春日神社の氏子であり、この氏子たちが王祇祭・黒川能の担い手である。なお、この氏子組織は地区の自治組織も兼ねている。

王祇祭は毎年2月1日から2日に行なわれ、

黒川の氏神である春日神社を祀る祭礼として、一年でもっとも重要な祭りとしてされている。この祭りで奉納される黒川能は現在、能540番、狂言50番を伝承しており、起源は室町時代にさかのぼる。上演組織「能座」は、春日神社の祭祀組織も兼ねた宗教性の強いもので、上座と下座の2つの組織にわかれ、それぞれが黒川内の2分された区域に位置している。2005年度、上座の座員は100戸、下座は129戸となっている。能座への加入は氏子の男子に限られ、能太夫とよばれる座長、三番叟、千歳など一部が世襲だが、そのほかは基本的に自由である。自分から志願したり親や友達に勧められたりして加入するが、中学や高校の受験、および大学入学や就職による都市部への移住などは、能座から疎遠になるきっかけとなっている。

黒川能の春日神社への奉納は年に4回、近隣の神社への奉納は2回行なわれる。奉納以外の公演として、7月に地元の市街地で「水焰の能」なるイベント公演、2月には春日神社で「蠟燭能」の公演が行なわれる。このほか各組織の依頼による不定期の公演がある。

黒川能のありようが近代において大きく変容したことはいうまでもない。近代に入って黒川能は民俗学者や能楽師など中央の知識人によって客観的に価値づけられ、1976年には国の重要無形民俗文化財に指定された²。その価値とは「中世以来」「能の源流」「芸の完成度」「信仰形態」といった概ね「過去の」な「貴重さ」にもとづいている。そうした価値づけの流れが当事者へも浸透したことは、1961年「黒川能保存会」の設立にはっきりと表れている。なお、黒川能保存会は2005年現在、役員に能座員のほか神職や自治体の職員、顧問には国会議

員や県知事、参与に鶴岡市議会議員らが名を連ねており、予算規模は100万円前後で、後継者育成や能装束修理に当てられている。つまり、近代以降の黒川能や王祇祭は、「保存」という近代的な活動をその実践のなかに内包するようになった。

王祇祭の進行と担い手

以下では王祇祭の内容の検討を進めたい。本稿では「現在の社会的意義」への視点にのっとして、とりわけ重要な部分のみを取り上げて検討を進めるので、記述はかな

り大まかなものとなっている。詳細については先行研究を参照されたい(戸川1974)。王祇祭の次第は表1のとおりである。

霜月祭りから演能まで

12月15日の「霜月祭」は神職3名が春日神社の神に祭りのはじまりを告げる儀礼とされる。これによって、王祇祭につながる一連の儀式がはじまる。

1月3日に行なわれる「興行」ではその年に上演する演目の役決めが行なわれる。

1月17日、「十七夜祭」では王祇祭の執行に関わる主だった人々が集結し、春日神社

日付	次第	担い手
12月15日	霜月祭(六所神社)	神職
1月3日	興行(公民館)	神職 能役者
1月17日	十七夜祭(春日神社)	神職 能太夫 当屋頭人 酒上げ
1月中旬頃(3日間)	豆腐焼き	当屋頭人 所帯持 地区の人々
1月29日	掛餅つき 降神祭(榊屋敷)	神職 地区の人々
1月30日	柴燈の儀(春日神社)	神職 当屋頭人
1月31日	掛餅かけ 当屋使い	地区の人々
2月1~2日	1日	降神 布つけ 座狩り 当乞い 座入り 振舞 女子衆への振舞
		大地踏
		千歳 翁 三番叟 脇能五番 狂言 四番
	2日	宮のぼり 朝尋常
	脇能	能役者
	大地踏	小児
	千歳 翁 三番叟	能太夫 能役者
	棚上り尋常 盃事 盛り花 餅切り尋常 布剥ぎ尋常	地区の若者 神職、折守、当屋頭人、王祇守、提灯持 地区の若者 宮司
2月3日	山方礼 師匠礼 衣装だたみ	神職 能役者 提灯持
2月4日	注連下ろし	神職

表1 王祇祭の進行と担い手

の神前に供物があげられる。このころから、能役者たちは肉や魚を絶つなどの精進に入る。

このすぐ後に、「豆腐焼き」という儀式が3日かけて行なわれる。王祇祭が行なわれる予定の当屋の敷地内に小屋が準備され、その中心部に炉が設置され、これを囲んで20名ほどの男女が豆腐を焼く。豆腐は祭りの参加者に供されるものである。

1月29日から1月31日にかけて、いよいよ王祇祭寸前の諸儀礼が行なわれる。1月29日「掛餅つき」では王祇祭のさいに社殿内に掛けておく一斗餅がつかれ、午後は「降神祭」が神職宅の庭で行なわれる。1月30日「柴燈の儀」では、春日神社の社殿に設けられた炉に「柴燈」と呼ばれる火がともされる。1月31日「掛餅かけ」では29日に作られた餅を社殿内の棚に掛ける。この日行なわれる「当屋使い」では氏子の家々に祭りはじまりを告知する。

2月1日は王祇祭本番となる。午前6時ごろから、神様が依りついているという2体の「王祇様」を春日神社から上下両座の当屋それぞれに移動し、安置する「降神」が行なわれる。10時ごろから演者の出欠を確認する「座狩り」、来年の当屋を決定する「当乞い」、座への新たな加入儀礼である「座入り」の順で儀式が行なわれる。これらが済むと座の人々に料理が振舞われる「振舞」となり、午後3時ごろ当屋内に能の舞台が設置される。

午後6時ごろ、いよいよ演能が始まる。当屋での祭祀は王祇様が住宅に臨在するというので慎重かつ厳粛に行なわれる。とりわけ王祇様の管理をになう「王祇守」、および当屋での神事一切を切り盛りする「所帯持」は、その役割が名誉であるとともに重責であり、本番となると強い緊張感を感

じるという。ちなみに、2007年に訪れたさい、演能がはじまる頃には抽選で参加が許可された地元外の客が詰め掛けて当屋はすし詰め状態となり、地元の人も場外に立っているような状況であった。

<大地踏>

演能は2月1日の当屋、2月2日の神社の双方で行なわれる。番組はその年によって異なるが、<大地踏>と<式三番>すなわち<千歳>、<翁>、<三番叟>は儀式的に重要な演目として、決まった順序で必ず行なわれる。

<大地踏>は、稚児が舞台を祓い清めて聖なる場所にし、寿ぎの詞を語るというような儀式性が高い厳粛な演目である。当屋と2日目の神社での祭祀いずれの場合もはじめに行なわれる。これを担うのは4歳から6歳程度の幼い男子で、上座と下座で2名ずつ計4名が前年の年末に選ばれる。<大地踏>を演じる4名のうちには選ばれることは家族にとって喜ばしいことであり、本人が意欲を示す場合も多い。役者が幼児であるにも関わらず込み入った構成を持ち、古い言葉の詞章を唱えなくてはならず、習得に時間を要するため、練習は他の能役者よりも若干早めの1ヶ月程度前に始められるのが通例である。

<大地踏>の本番では、王祇様が舞台中央に立てられ、その下で小児がいくつかの所作を行なう。<大地踏>は当屋の場合30分ほど、神社では上座下座の合同なので45分ほどかかる。無事演目が終わると、演じた子供に賞状と記念品が贈られる。

<翁>

<翁>は、最高かつ最重要な神のあらわれを意味する厳粛な祝祷舞とされており、

上座下座それぞれの中心人物「能太夫」によって舞われ、能太夫が交代するさいは「翁伝授」という儀式が行なわれるなど、非常に重く取り扱われている。2008年現在、上座の能太夫は斎藤賢一氏、下座は上野由部氏である。斎藤氏は王祇会館の館長、ならびに黒川地区農業村落振興会会長を、上野氏は鶴岡市立豊浦中学校校長、および黒川能保存伝承事業振興会常任理事を務めるなど、地域の現実生活においても重要な役割を担っている。つまり<翁>という前近代に構成された象徴は過去の遺物ではなく、現在の現実と相即しているということができよう。現実の日常の暮らしにおいて人々に頼られる重要人物が、王祇祭の舞台においてそのまま最重要な神としてあらわれているのである。

脇能と狂言

能楽愛好家にも注目される黒川能の一般的な演目は、神事としての意味合いがありつつも、概ね審美的に鑑賞されているといつてよい。先に述べたイベントなどでの公演でも<式三番>が演じられることはなく、いつも脇能と狂言が演じられる。2月1日の当屋では徹夜で、脇能（神事能以外の一般的な演目）5番、狂言4番が演じられるが、これは未熟な演者の練習も兼ねたものとなっている。2月2日は式三番を除く脇能1番のみ演じられるが、これは熟練者によるものである。なお、能座のなかでは青少年も重要な役割を担われる。

青少年男子の活躍

神社における王祇祭では、青少年男子の活躍が非常に目立つ。

2月2日朝6時ごろに行なわれる「朝尋常」は、王祇様を当屋から春日神社へ移す儀礼

であるが、上座と下座はどちらが王祇様を先に神社内に立てかけられるかで、男衆が猛烈な勢いで競い合う。

この後の演能で<三番叟>が演じられるさいは、舞台脇の通路で大勢の若い男衆が、大声で叫びながら強く床を踏み鳴らす。それはほとんど地鳴りのように響き、祭りの雰囲気盛り上げている。

15時頃になると、社殿内の餅が掛かっている棚に、上座、下座のどちらが先に登るか競争がある。「棚上り尋常」と呼ばれるこの次第もまた、大変な騒ぎである。

ついで彼らは猛然と棚の上に立てかけた王祇様を下へ落とし、ついで棚に掛けられた餅を括りつけた縄を切り、餅を下へ落とす競争が行なわれる。これが「餅切り尋常」である。

ついで落とされた王祇様の布を若者たちが剥ぎ、来年の当屋で王祇守を務める予定の人の首に巻く「布剥ぎ尋常」となる。この後、ほどなくして16時30分頃、王祇祭は終了する。

以上に見たように、神社での祭りにおいてははじまりの火蓋が切られるところから終盤で王祇様を落とすところまで、儀礼次第の要所で若者が重要な役割を担わされていることがわかる。それは儀礼次第の執行とともに、活力のみなぎった激しい競争によって盛り上げる役割を果たしている。

黒川能および王祇祭における組織構造とその意義

以上に検討してきた王祇祭の実践における、組織構造とそこに生じてくる意義について考察したい。まずは表2にまとめてみる。

人々の特徴を生かす組織構造

黒川能と王祇祭の組織構造において第一

種別	担当部分	生かされる特徴	得られる意義		
役者の幼児・少年	大地踏・演能	元気さ・初々しさ	社会化	楽しみ 芸の熟練 「三代友達」のつながり	つ な が り 誇 り 一 体 感 祈 り
役者の青年	演能	元気さ・熱心さ			
座長・師匠	翁・指導	熟達・知恵の蓄積	社会参加・責任感・楽しみ		
地区の若者	祭祀執行	エネルギー			
神職	祭祀執行	精神的中枢			
所帯持・折盛	祭祀の切り盛り	知恵	責任感		
年配の女性	豆腐の焼き手	調理技術			
地区の人々	準備・豆腐焼き	仕事要領			
地区の女性	配膳	調理技術 配慮能力			

表2 黒川能および王祇祭における組織構造と得られる意義

に注目されるのは、老若男女すべての人に参与機会が与えられていることである。幼い子供から老人まで、すべての種別の人々にくまなく役割が与えられている。この役割分担でさらに興味深いのは、それぞれの種別の特徴を生かすよう構成されていることである。

しかし一方で、伝統的に能座や神事の執行に女性が加われないという男女不平等が存在する。これは現代の価値観に見合わないのではないかと関係者のなかでも昨今議論になっているらしいが、依然として女人禁制は維持されている。女性の参加を自由にすることで、黒川能がもつ独特のバランスや緊張感が取り返しのつかないかたちで失われてしまうという不安が当事者のなかに存在するようだ。

師匠の人たちにおける知恵の蓄積と指導力、青少年男子の激しい活力などといった彼らの特徴は、王祇祭においては存分に生かされている。すでに述べたように、現実社会においても重要人物である能太夫が、そのまま重要なカミとなって<翁>を舞う。能太夫だけでなく指導役となるような年配の人は見た限り少なくとも30名は存在し、

祭りの場を引き締めている。神職たちの祈りの姿勢もまた、黒川能および王祇祭執行の中枢を担う。彼らのような人々が、黒川能と王祇祭全体の活動を引き締めるような精神的中枢であることは疑いないだろう。

一方でまた、競争神事や三番叟での「地鳴り」は、激しい騒ぎによって王祇祭を要所で締める重要なものだが、これは青少年男子の闘争心や身体の強烈な躍動によってこそ達成されるものである。若者のエネルギーは、王祇祭になくはならない躍動的な部分を担うことで、最大限に生かされている。

女性たちは調理や配膳などに忙しく働いているが、そこには充実感も見てとることができる。こうした裏方の役割を抑圧的なものか、それとも充実したものかを一概に評価することは当事者でも難しいが、調理技術や配慮感覚が生かされているということは出来るだろう。この点でひとまず評価するなら、祭礼の組織には参与する人たちの特徴が組み込まれており、参与者たちが適材適所に納まるよう、制度が熟成されているということが出来る。とりわけ上に挙げた師匠格の人々、そして青少年男子たち

の関わりには注目される。それぞれの特徴が神事に根ざしたかたちで最大限に生かされているのである。以上のことから、王祇祭の次第はさまざまな属性の人々からなる実際の社会全体とその有機的統合を表わすかのようなものである。

幼児と青少年の社会化

つぎに、この祭礼がもたらす社会的意義について触れてみよう。

はじめに教育的意義を挙げておきたい。多くの指摘があるように、現代において青少年は効力のない者として大人の社会からは区別され管理される存在である（稲垣編 2006）。しかし、これとは反対に黒川では、幼児を含む青少年が大人の社会でも最大限の厳格さと重要性を持った祭祀執行において、かなり重要度が高い役割を担わされている。幼児がそうした役割を担わされる〈大地踏〉に関して、次のような記事がある。

王祇祭の初舞台で“大地踏”を演じた、まだあどけない五歳の男の児が能太夫に抱かれて楽屋に戻ってきた。一ヶ月もの稽古を積み、師匠の教えを見事に演じた安堵感が漂う。「よかった、良かった」と若い役者たちの静かな声には無表情で、すばやく脱ぎかえる装束に目をやる。そこへ母親が駆けつけ、抱きしめて頬ずりをした。きょとんと母親の仕草に一瞬戸惑い、目を合わせた。「良くできたのう」母親の目は涙で笑っていた。子どもは長い稽古と、そして今終えた“大地踏”をゆっくりと納得の行く表情を顔に表した（櫛引町青少年育成推進委員会 2001）。

ここには長い稽古を経て重い役割を果たした幼児のまわりに展開する共同性のありようが描かれている。それはとくに〈大地踏〉だけでなく、青少年が能の演技をつと

めあげるときにも生じるものであろう。そこには地域社会の緊密な相互作用のなかでの達成と「納得」がある。王祇祭における幼児や青少年のあり方は「社会的に効力がない」、「社会的に認められない」ような自己イメージを16～20歳前後に就職するまで持たざるを得ないという近代的なあり方と対照的である。幼児や青少年は「社会的な私」として黒川社会に参加していくことで、自分たちだけの世界や虚構の世界に閉じられることなく、大人や、年寄りや、思いやりや、人の営みや、人間について、人生についての、その複雑極まりない現実の宇宙を全体的に身をもって学習していく。それはちょうどレイヴとウェンガーが提出したような全人的な社会化としての学習過程と見ることができる（Lave & Wenger 1991）。言語化された表層的な知識の記憶ではなく、無味乾燥な数理能力の開発でもなく、学級という閉鎖空間での歪んだ画一化でもない。幼児や青少年の王祇祭への参加は、単なる片手間や遊びというだけでなく、現実の世界を全体論的に学習しながら社会に参加していくという高度な社会化をもたらすと考えられる。

人々のつながり、および地域性と持続性

つぎに地域における人々のつながりについて考えてみたい。祭りにおける社会統合は一般的に見られるものであるが、ここでは当事者の発言から、黒川における人々のつながりを検証してみよう。

AA氏（1971年5月9日生）

Q：黒川能や王祇祭は、地域の人にとってどういう意義があると思いますか？

A：昔と今のありかたは、当然変わっているのかもしれないですけど、いまだ

けを見てみれば、まとまりのための、人間同士をつないでおくための……ような気はするんですけどね……たとえばこういう田舎にいて、消防団だとか、いろんな集まりがあるんですけど、それだけではつながらない人とのつながりって自分のなかではあるんです。やっぱり精神的な。年配の人だろうが、子供だろうが、お祭りのときはああいう役割を果たしたと。そして普段道端で会ったりするとき話すぐらいのものよりも、もっと一歩踏み込んで、「あの子はああいう子だ、こういう考え持ってる」みたいなそういうように、人をつなげておくためのものであってほしいってのもあるんですけど。そういうものかなって。³

「昔と今のありかたは当然変わっている」として、AA氏は王祇祭のかつてから現在にいたる変容を自覚している。ここで言われている「昔のありかた」とはおそらく、強く信仰に根ざしたありかたと思われる。しかし現在では、中心人物には強固な信仰心が生きているが、地域全体の雰囲気としては、かつてほどに信仰は強くなっていない。近代化によって生じた社会の変容は、黒川においても例外ではない。黒川でも農業の機械化や農外就業は進み、自然に対する信仰も弱まってしまった。AA氏は、このような状況における黒川能とお祭りの「今のありかた」の意義を、「人間同士をつないでおくための」ものと捉えている。王祇祭における諸要素のうち、信仰の側面は弱まってしまったかもしれない。しかしそうであっても、もうひとつの要素「人間をつなぐ」ところに王祇祭の現在の意義があるのだ。

そのつながりの特徴として、「年配の人だ

ろうが、子供だろうが」という部分に表われている世代を超えているということ、および「いろんな集まり」ではつながらない「精神的な」、「一歩踏み込んで」のつながりの深さが示されている。こうした深いつながりをもたらしことこそが、王祇祭の現在の、社会的意義と見ることができる。

もうひとつの発言を検討してみよう。

TW氏（1940年3月5日生）

Q：黒川能は、地域の人々にとってはどんな意義があるとお考えですか？

A：うーん、それは人それぞれだと思うけども、前の考えと今の考えとは、多少異なるとは思いますが、まあひとつは、500年以上の黒川に根づいてきた人たちの、抛りどころでもあった神事でもあるもんだからね。それを絶やしてしまうことで黒川ってのは崩壊に近くなるっていうような感じになるってことです。もうひとつは、国の重要無形文化財に指定されてるから、その誇りちゅうか、継続していくことのひとつの責任感になってます。⁴

発言の後半に「重要文化財指定」が、「継続の責任感」になっていると示されている。第一節ですでに述べたように、近代において黒川能には客観的な価値が付与された。それは地元の人々の誇りとなり、その継続への責任感をもたらししている。

発言の前半で注目されるのが、黒川能が「500年以上の黒川に根づいてきた人たちの、抛りどころ」という部分である。こうした「古さ」や「由緒」を理念的な「価値」として見れば、文化財としての価値づけと重なる。しかしこの発言に示されるのは「価値」というよりもむしろ、地域の場において「身をもって」体験される「先祖」のリアリテ

イから来るもののように思われる。つまり以下に述べるように「理念」よりも「身体」に関わる問題として考えるほうが自然である。春日神社の社殿内には、大量に先祖の肖像が掛けられている。これによって「先祖」はつねに身をもって感じられるのではないか。また、春日神社に奉仕する神職は「伝承は自分などがやれるものではない。先祖がやってきたものだ」という。そこには自分を伝承の主体とすることを否定し、先祖こそを伝承の主体とするほどに重要な存在とする意識を見ることができる。これらは単に理念的なものだろうか。

先ほど挙げたA A氏の発言のように、黒川の人々は世代を超えた人々の交流を強調することが多い。能座のなかで「三代友達」という言葉がある。それは、親、子、孫の三代が、友達のように親しいことを意味する言葉だが、インタビューした6名のうち3名が、黒川能にとってもっとも大切なこととして「三代友達」を挙げていた。こうした「身をもって」実感される世代を超えたつながりの延長線上に先祖が存在することは理念以前の事実である。ここでは500年以上の先祖のつながりは、理念的な価値である以前に、わたしたちがよく知っている親との絆と同じである。特定の地域に根ざした継続的生活では親を育てた親がつねに直接的に目の前に存在する。そうして身をもって経験される「三代友達」の親しいつながりのなかに先祖が存在する。このリアルな先祖のつながりの延長線上で、過去に存在するすべての先祖の統一体として、王祇祭の祭祀の対象、氏神としての春日神社がある。すでに触れたように、氏神がかつての自然村における共同体の象徴であったことに照らせば、親やその親との「超世代的」な親しい結びつきのリアリティにこそ、

持続性のなかで特定の地域に根ざすことの必然性がある。

当事者たちが「三代友達」を黒川能における最大の意義のひとつとしていることから、それは個々人における自発性の重要な動因のひとつと考えられる。そうであるならば、たしかにそうした自発性を「絶やしてしまうこと」で、黒川社会そのものが「崩壊に近くなる」のも自然なことであろう。

世代間の連続と継承は<大地踏>の表現に見てとることができる。<大地踏>の練習では、師匠から稚児へと演目が伝授されるが、本番の上演でも師匠が稚児を補佐するような場面がある。それは、あたかも最高度に知恵の蓄積された師匠から、新たな生を引き受ける稚児へと、祭祀や人生の営みそのものが受け渡されることが象徴的に表れているかのようだ。たしかにこれは、天野が注目したような(天野 2006)、「知の蓄積」としての老人から、新しい生命である子どもへと知恵が引き継がれていくという、前近代的な世代間共生のありかたと符合しており、それが現代において生きている実例のように見える。

結論

最後に、これまでの考察についてまとめたい。

王祇祭の組織構造においては、能座長、神職、小児、少年、青年、男性、女性、年寄りなどといった多様な人々におけるそれぞれに固有の特徴が、祭りにおいて生かされるよう構成されていた。王祇祭ではとくに神事に関わる局面で、能太夫、神職、青少年らの特徴が最大限に生かされているところに大きな特徴があった。ここでは前近代以来の祭礼形態と、現実の黒川社会との相互浸透を見てとれる。さまざまな属性の

人々がそれぞれの特徴を活かす現実の黒川社会が、王祇祭の組織構造に重なっているのである。

この点でさらに注目されるのが、幼児や青少年が祭祀において重大な役割を担わされることであった。〈大地踏〉や演能、および神社の儀礼において幼児や青少年は、大人の命運を握るほどの重大な責任を担わされる。これは近代における幼児や青少年の取り扱いとは正反対のものとして注目される。このことはあたかも、幼児や青少年が社会に参加していく全体論的な学習過程の重要性がコミュニティにおいて鋭く捉えられ、これが制度として練り上げられてきたようにも見える。

「三代友達」に表わされる世代を超えたつながりは理念的次元のものではなく、親との絆のような身をもって知られるリアリティであった。それは黒川という特定の地域に根ざすことでそのまま「三代」を超えて先祖へと連続しており、過去におけるすべての先祖は統一体となって春日神社に象徴される。特定の地域に根ざすことの必然性は、先祖とつながるこの「超世代性」のリアリティに求められる。そして王祇祭は、まさにそうした意味で伝統的であるという点において、現代村落社会における人々のつながりや個々人の自発性と不可分になっているといえよう。

本稿をもって王祇祭を総合的に見渡すことは到底できない。王祇祭がそれほどに膨大な要素と、深い意味をもっていることは、一見して予想される。したがって本稿で考えてきたことは、一度の王祇祭への参加と、当事者との対話のわずかな時間をもとにして考えられるわずかな一面にすぎない。しかしともかくも、王祇祭や黒川能が単なる「貴重な過去の文化遺産」というような、現

代社会による一般的な見方とは異なる、「現代的」に重大な意義と力をもっていることの一端は、本稿によって示すことができたように思う。伝統文化は「貴重」というだけでは足りない。それは現代社会が失った、そして学ぶべき成熟を、生活のなかに生かし続けているのである。

注

1. 史学や民俗学では非常に重要なものとされるので、すでにいくつもの先行研究がある（真壁 1971；戸川 1974；桜井 2003）。
2. 近代における黒川能の歴史については石山による詳細な報告がある（石山 2008）。石山の分析は、能楽や黒川能の近代において構築されたイメージと、当事者のリアリティを対比させたものとして興味深い。
3. A A氏は上座で笛担当。笛の演奏にはこだわりがあり、名曲や気に入っている曲目を挙げるなど、能への愛好心は強い。一度東京の企業に勤めたが、1年ほどで黒川に戻ってきたという。座の中でも若手の中心的な役割を果たし、今後が期待されている。2007年12月9日聞き取り。
4. T W氏は上座で大鼓担当。演奏に対するこだわりはもちろん、さまざまな問題に対する意識が高く、黒川をめぐる多くの課題について語ってくださった。2007年2月6日聞き取り。

参考文献

- 天野正子, 2006『古いへのまなざし—日本近代は何を見失ったか』平凡社
- 稲垣恭子編, 2006『子ども・学校・社会—教育と文化の社会学』世界思想社
- 石山祥子, 2008「黒川能と能楽の近代」『近代日本における表象と語り』[家族写真の歴史民俗学的研究] 科学研究費補助金・中間報告書、大阪大学
- 金子剛, 1996「祭りと地域社会」『地域社会学年報』第8集、205-231頁
- 榎引町青少年育成推進委員会, 2001『くしびき

青少年』33号、櫛引町
Lave, Jean and Wenger, Etienne 1991 *Situated Learning-Legitimate Peripheral Participation*. = 1993, 佐伯胖訳 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書)
真壁仁, 1971『黒川能—農民の生活と芸術』日本放送出版協会
松平誠, 1990『都市祝祭の社会学』有斐閣
恩田守雄, 2006『互助社会論—ユイ、モヤイ、テツダイの民俗社会学』世界思想社
桜井昭男, 2003『黒川能と興行』同成社
佐藤玄祐, 2005『聞き書き・昭和の人々 齒

がみして生きて』鶴岡書店
鈴木榮太郎, 1969『鈴木榮太郎著作集 I』未来社
竹元秀樹, 2008「自発的地域活動の生起・成長要因と現代的意義—宮崎県都市「おかげ祭り」を事例に—」『地域社会学年報』第20集、89-102頁
戸川安章, 1974『黒川能の歴史と風土』中央書院

ながさわ・そうへい
南山宗教文化研究所非常勤研究員